



WOMEN'S SPORTS



WSF(米国女性スポーツ財団)の機関誌が「Women's Sports」である。財団の設立当初(1974年)には、創立者のビリー・ジーン・キングの手で刊行されたが、採算が取れず数年で廃刊、新たに現在の「Women's Sports」が発行されるようになった。

雑誌の内容は、同財団のニュースだけにとどまらず、プロ、アマチュアすべてにわたる女性スポーツを取りあげている。第一線で活躍している選手は勿論のこと、女性スポーツを陰で支える人たちの話題、或いはスポーツ科学の話、高校生選手のための大学スカラシップの一覧表など、テーマは多岐にわたっている。

中とじ、A4版のスタイルは、スポーツ・イラストレイテッド誌等と同じで、月1回の発行。広告は、化粧品関係ではエイボン、メイベリン、ボンネベル、スポーツ用品関係では、ニューバランス、ノーチラスといった企業のほか、最近では日本の美津濃、デサントが1ページ広告を出している。

以下、昨年のバックナンバーから、いくつかの目次を拾ってみると――。

●1月号/「赤チャンをいかにしてチャンピオンに育てるか」「菜食は選手の食事として是非

か」「1980年、話題の女子選手」

●2月号/「プロ選手はそれほど楽しい商売ではない」「女性スポーツライター草分け」

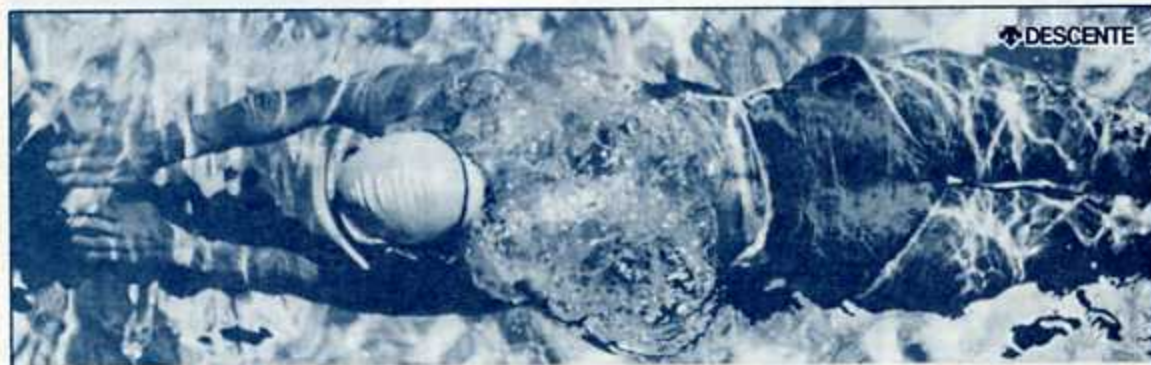
●4月号/「広告のために装う女性スポーツ選手」「ボストンマラソン初の女性ランナー」「'81年スポーツキャンプガイドとスカラシップ」

●8月号/「18歳のトップスイマー、トレーシー・コールキンズ」「車イスのランナー」「第85回ボストンマラソン優勝のパーティ・カタラノ」「女子サッカーチームの監督の願い」

●12月号/「筋肉マニア=アイアン・レディーの筋肉づくり」「バレーボール=大学、ナショナルチーム、プロチームの違い」「国際的スプリンター、エベリン・アッシュフォードのすべて」

このほか、折りに触れて女性にとってのスポーツの重要性を強調している。1980年8月号では「学校を卒業してから」というタイトルで、最近の米国では、以前は見るとスポーツだけだった30歳前後の大人たちが、積極的にジョギングやテニスをするようになってきた傾向を指摘し、手頃なスポーツ施設が見つからなければ、WSF事務局へ――というPRも、しっかり加えている。

次回は、1982年4月号に特集された「東ドイツ女子選手とステロイド」の話を、要訳してみたい。



DESCENTE

限界に挑むとき、一瞬は美しい映像になる。

わずか数秒の短縮に、全力をだして泳ぐ。その一瞬は美しい「アリーナ」スイムウェア。スイマーの極限の動きを、より激しいストロークへと導くすぐれた機能。そしてあくまでもシンプルなデザイン。記録をめざすスイマーにタイムの限界はない。

arena

●「アリーナ」は、米泳王國アメリカをはじめ、世界13ヶ國のオフィシャルウェアです。